

意見・考えの表出を求める指導の L2 ライティングにおける効果

紺渡 弘幸
仁愛大学人間学部

The effects of instruction requiring L2 learners to express ideas and opinions
on the development of L2 writing

Hiroyuki KONDO

Department of Communication, Faculty of Human Studies, Jin-ai University

The present study examined the effects of instruction requiring L2 learners to express ideas and opinions on the development of their writings. Ten Japanese university students worked on the Agree/Disagree Tasks, in which they shared ideas and opinions on several controversial topics with each other and wrote opinion paragraphs within ten minutes. Their written production was analyzed with quantitative measures of complexity, accuracy, and fluency. The results revealed that the AD Tasks have positive effects on the development of the learners' writing abilities and that the instruction which requires L2 learners to express ideas and opinions could effectively promote L2 learning.

Key words: tasks, ideas and opinions, writing

1. はじめに

コミュニケーション能力を向上させるためには、受容的であれ、産出的であれコミュニケーションを目的とした言語使用の経験が必要である。とりわけ目標言語への接触量が限られているわれわれの EFL 環境では授業において「意見・考え」を理解させ、表現させる指導が重要な意味を持つ。「意見・考え」を理解・表現することは中核的な言語機能であり、言語学習において意見・考えを理解させたり、表現させたりする機会が乏しいことはひじょうに不自然なことであるが、実際に授業においてどれだけ「意見・考え」のやりとりが行われているかはきわめて疑問である。

「意見・考え」のやりとりは、伝達する情報を人工的に設定して行うようなインフォメーションギャップ活動とは違って、学習者自身の本当のメッセージを交換するコミュニケーションであり、機械的な英語の練習とは本質的に異なる活動になる。また、「意見・考え」の表出にあたっては、記憶されている既習の言語形式に繰り返しアクセスして、適切な形式を選択し、使用する必要に迫られるので、その定着・自動化の可能性がある。さらに、自己関与度の観点から見れば、自分

自身の意見・考えを伝達することから、コミュニケーションをはかろうとする意欲を高め、動機づけを促進する効果も期待できる。このような理由から、英語の授業における「意見・考え」の表出を求める効果的な指導法に関する研究・開発を行うこととした。

分析的にみれば、「意見・考え」は、比較、選択、価値判断、優先順位、問題解決、仮定、嗜好、感情、提案、主張などに下位分類される。「意見・考え」を表出させるにあたってこのような下位分類を考慮すれば多様なタスクが考えられる。そこでまず、インプット思考（準備）→アウトプットというプロセスでスキルを有機的に統合して、学習者に意見・考えを表出させる Agree/Disagree Task(以下 AD Task)を考案し実践した。その際学習者が書いた作文に含まれる総語数や作文の評価および質問紙調査によってこのタスクの学習を促進する効果を調べたところ、質・量の両側面で作文の向上が見られ、学習に参加した学生のタスクに対する受け止めも非常に肯定的で、学習を促進する効果がうかがわれる結果が得られた(紺渡, 2013)。

このタスクの学習を促進する効果を追試するために、2013 年の 5 月よりあらためて AD Task を用いた指導を行った。この指導では単純なタスクの反復にと

どまらず、学習がより効果的なものになるように、書かせた作文に含まれる言語形式の誤りを訂正させた後、明示的な文法説明によるフィードバックを与えるステップを組み込んで、AD Task を改善した。

また、このタスクの効果の再検証にあたっては、近年、第二言語の習熟度や運用能力を示す指標としてしばしば用いられている複雑さ (Complexity)、正確さ (Accuracy)、流暢さ (Fluency) の3要素 (Diane-Larsen Freeman 2009、Ellis 2009、Housen & Kuiken 2009、Housen, Kuiken, & Vedder 2012) の観点から調べた。

2. 研究

2.1 研究目的

本研究では、あらためて異なる学習者を対象にAD Task を用いた指導を行い、その際学習者によって書かれた作文をこの複雑さ (Complexity)、正確さ (Accuracy)、流暢さ (Fluency) の観点から分析し、このタスクの英語学習を促進する効果を再検証することが目的である。

2.2 研究課題

AD Task の効果をさらに詳しく調べるために以下の研究課題を設定した。

RQ1: AD Task は学習者作文の複雑さ (Complexity) を向上させるか。

RQ2: AD Task は学習者作文の正確さ (Accuracy) を向上させるか。

RQ3: AD Task は学習者作文の流暢さ (Fluency) を向上させるか。

2.3 指導対象

指導対象は、筆者のライティングの授業を取っている日本人大学生 (3年生) 13名であった。

2.4 実施期間

2013年5月から7月にかけて合計で6回、AD Task を用いた指導を行った。

2.5 材料 (トピック)

AD Task の賛否を論じる命題は紺渡 (2013) で報告された実践におけるものと同じ以下の6つを使用した。¹

① Smoking should be banned at all restaurants.

② Young Japanese people should study abroad at least once.

③ We should not allow elementary school children to use the Internet.

④ It is important for college students to have a part-time job.

⑤ We should abolish all the nuclear power plants in Japan as soon as possible.

⑥ The most important aspect of a job is the money a person earns.

2.6 Agree/Disagree Task の実施手順

AD Task の実施手順は以下のものであった。²

(1) 事前指導 (Pre-task)

① Introductory talk (5分間)

この活動は、授業の流れの中で、教科書本文の指導をした後にその内容に関して賛否を問う命題を設定して行うのが望ましい。内容についての情報や関連の語彙が教科書本文の指導の中ですでに共有されているので、無理なく行うことができる。教科書本文の指導後に命題を設定して行う場合はこのIntroductory talkのステップは unnecessary になる。適切な命題が設定できない場合は、本文の内容とは別に独立して行うこともできるが、その場合は命題に関する背景知識が十分にあるかどうか活動の成否を左右することになる。未知の内容や理解が十分でない内容をトピックとして取り上げる場合はこのステップであらかじめ基礎的な情報を提供し、判断する材料を与えておくことが必要である。³

(2) 事中指導 (In-task)

② Writing a speech memo (2分間)

スピーチの準備として以下のようなメモを書かせる。まず、議論すべき命題について賛成か反対か、いずれか一方の立場を必ず選択させる。次に自分の意見をサポートする理由や具体例を2つ考えさせ、キーワードやキーフレーズを用いてそれらをメモさせる。単文の箇条書き程度は認めるが、スピーチ原稿を書かせることはしない。最後に主張を異なる表現を用いて述べ、結論として締めくくるように考えさせる。

Nuclear Power Plants

1. PROPOSITION
Do you agree with the following statement? We should abolish all the nuclear power plants in Japan as soon as possible. Use specific reasons and examples to support your opinions.
2. YOUR OPINION
I (agree disagree).
3. SUPPORTING IDEAS(REASONS OR EXAMPLES)
(1)
(2)
4. CONCLUSION

③ Practice (1 分間)

メモを書かせた後、実際に意見交換させる前に、それを見ながら自分一人でスピーチさせる。

(2) 意見交換 (Sharing ideas and opinions)

④ Speech in pairs 1 (1 分間×2)

リハーサルの後、ペアで意見交換させる。スピーチは教師が時間を計測し、一人 1 分間で話させる。

⑤ Reflection 1 (1 分間)

1 回目の意見交換を終えた後で、スピーチする際につまづいた表現を辞書で確認させる。

⑥ Speech in pairs 2 (1 分間×2)

ペアを組み替えて、2 回目の意見交換を行う。1 回目と同様、時間を計測して行う。

⑦ Reflection 2 (1 分間)

1 回目と同様に意見交換を終えた後で、スピーチする際につまづいた表現を辞書で確認させる。

⑧ Speech in front of the class (5 分間)

時間に余裕があれば、2、3 名にクラスの前でスピーチさせる。

⑨ Writing an opinion paragraph (10 分間)

最後に、10 分間で opinion paragraph を書かせる。このパラグラフはスピーチ（メモ）の構成に対応し、賛否の主張を述べるトピック・センテンス、主張を支える 2 つの理由あるいは例を示すサポーティング・センテンス、そして主張を異なる表現で言い換えたコンクルーディング・センテンスを含んだものである。授業中に書かせる場合は時間的制約¹のため、10 分間で書かせるが、時間の制約を求めず、家庭学習の課題とすることもできる。

(3) 事後指導 (Post-task)

⑩ Error Correction (10 分間)

以上の指導手順に加えて、事後指導として、次の時間に学習者の作文に共通して見られた誤りを取り上げ、振り返りを行った。誤りは重要なもの (global error) や特に頻繁に見受けられるもの 5～10 項目に限定し、誤りを含む文をペアで話し合って訂正させ、その後で明示的な文法的説明をして確認した。

2.7 作文の分析

6 回の AD Task において、それぞれ異なるトピックについて学習者が意見・考えを述べた作文を複雑さ (Complexity)、正確さ (Accuracy)、流暢さ (Fluency) の 3 つの観点から分析した。参加者は 13 名であったが、欠席して作文の提出が 1 回でもできなかった 3 名を除外し、最終的に 10 名の合計 60 の作文を調査の対象とし、その前半 3 回の作文と後半 3 回の作文の分析結果を比較した。併せて、筆者が行った作文の評価についても同様に比較した。

2.7.1 複雑さ (Complexity) の分析

複雑さ (Complexity) は、総節数に対する従属節数の割合や総 T ユニット数に対する節数の割合、一文に含まれる語数等で表される。本研究では、T-unit の数に対する従属節の割合で調べることとした。

2.7.2 正確さ (Accuracy) の分析

正確さ (Accuracy) は、総 T ユニット数に対する誤りのない T ユニット数の割合や総節数に対する誤りのない節数の割合で示される。あるいはまた形態素、主語動詞の一致、時制等の特定の個別の言語特徴に焦点をあてて示されることもある。ここでは、T-unit の数に対するエラーのない T-unit の数の割合を採用した。

2.7.3 流暢さ (Fluency) の分析

流暢さ (Fluency) は、スピーチの場合は発話の長さ、休止の数などで示される一方、ライティングにおいてはテキストに含まれる語数、T ユニット数、節数等で測定される。この調査では 10 分間で書かれた作文の総語数 (Token) で調べた。

3. 結果と考察

3.1 作文の複雑さ (Complexity)

表1および図1は、AD Taskにおいて学習者が書いた前半3回と後半3回の作文の複雑さの比較を表している。

表1. 複雑さの比較

度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
前半 10	.13	.65	.389	.176
後半 10	.27	.64	.436	.129

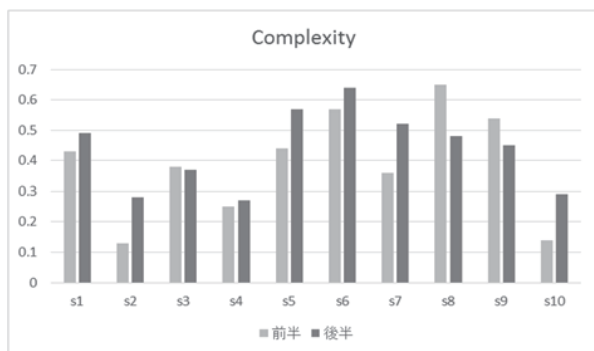


図1. 複雑さの比較

参加した学習者10名のうち7名において複雑さの向上が見られたが、ウイルコクソンの符号付順位検定を行ったところ、前半と後半の複雑さに有意差は認められなかった。

このAD Taskにおいては、作文を書く時間が10分間と限られているので、学習者が速く、多く書こうとすればするほど、作文の流暢さ (Fluency) との trade-off で作文の複雑さ (Complexity) が低下する可能性がある。

3.2 作文の正確さ (Accuracy)

表2および図2は、AD Taskにおいて学習者が書いた前半3回と後半3回の作文の正確さの比較を表している。

表2. 正確さの比較

度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
前半 10	.27	.82	.561	.168
後半 10	.38	.89	.683	.169

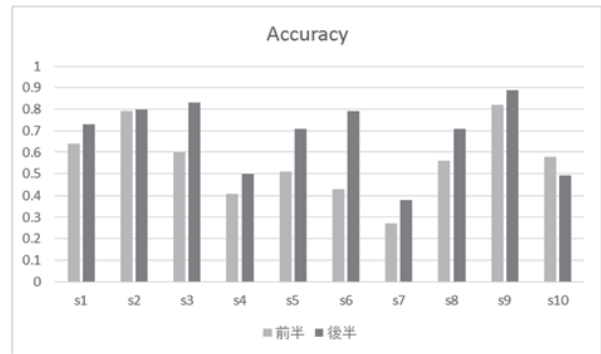


図2. 正確さの比較

10名のうち9名に正確さの向上が見られ、ウイルコクソンの符号付順位検定を行ったところ、前半と後半の正確さに有意差が認められた ($p < .05$)。タスクの反復効果に加えて、今回のAD Taskには、Post-taskとして誤りの訂正のステップを組み込んで改善を試みたことが作文の正確さにつながった可能性がある。

3.3 作文の流暢さ (Fluency)

表3および図3は、AD Taskにおいて学習者が書いた前半3回と後半3回の作文の流暢さの比較を表している。

表3. 流暢さの比較

度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
前半 10	81.70	124.70	99.83	12.899
後半 10	94.70	140.00	113.1	14.198

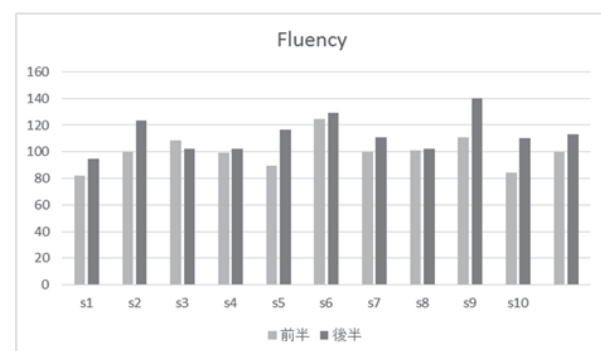


図3. 流暢さの比較

10名のうち9名に流暢さの向上が見られ、ウイルコクソンの符号付順位検定を行ったところ、前半と後半の流暢さに有意差が認められた ($p < .05$)。

3.4 作文の評価

作文の評価は指導者である筆者による holistic な評価⁴で、A、B+、B、B-、C の 5 段階で評価した。表 4 および図 4 は A → 5、B+ → 4、B → 3、B- → 2、C → 1 のように点数化した評価結果の前半と後半の比較を示している。

表 4. 作文の評価

度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
前半 10	1.00	3.00	1.798	.633
後半 10	1.67	4.67	3.833	.946

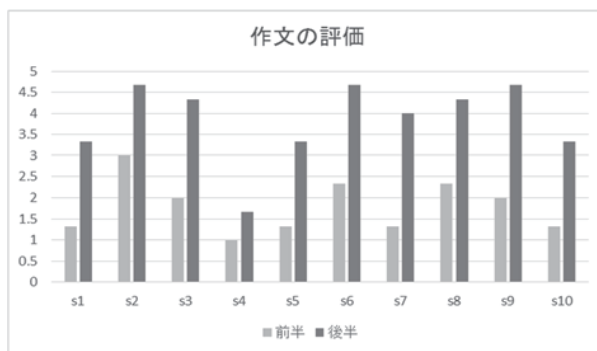


図 4. 作文の評価得点の比較

複雑さ (Complexity)、正確さ (Accuracy)、流暢さ (Fluency) の調査と同様に前半 3 回の作文と後半 3 回の作文の評価の平均得点を比較すると、参加者全員において向上が見られた。前半と後半の評価得点の平均値の差をウイルコクソンの符号付順位検定で調べたところ有意であった ($p < .05$)。指導者である筆者による評価のみに基づく比較ではあるが、作文の内容や構成も含めた評価の点からもこの指導法の有効性が再確認された。

4. おわりに

本研究では学習者に賛否を問う命題を提示して、意見・考えの表出を求める AD Task の学習を促進する効果について、学習者がこのタスクの中で書いた作文を複雑さ (Complexity)、正確さ (Accuracy)、流暢さ (Fluency) の観点から分析して再検証した。その結果、正確さと流暢さにおいて向上が見られ、また、作文の言語面のみならず内容や構成面をも含めた評価におい

ても進歩がうかがえ、ライティングに関して AD Task による学習促進効果が確認された。

AD Task は、ある命題について賛成か反対か立場を決めて自分の意見・考えを主張するという点においてディベートに似ているが、一方、相手と異なる意見・考えの正当性を主張し、相手を言い負かそうとするディベートとは違って、相手と同じ意見・考えを述べてもかまわない。自分の本当の意見・考えを述べるので、勝敗や相手へのチャレンジといったゲーム的要素にとらわれることなく、より自然なコミュニケーションが行われる。

この AD Task は、①学習者に意見・考えの表出機会を提供する、②4つのスキルの有機的統合がはかれる、③タスクの反復による慣れと心理的抵抗の軽減が期待できる、④既習言語知識の定着・自動化を促進する可能性がある、⑤言語と内容の学習の一体化が容易である、⑥談話構成の認知的フレームワークを提供する、⑦ライティング力を向上させる、⑧インタラクティブな学習ができる、⑨言語習得を促進する他者からのインプットが得られる (内容面・言語面)、⑩自分の意見・考えの表出による動機づけを促す、といった特長や可能性を持っている。

第二言語習得研究は言語習得におけるインプットのみならずアウトプットの重要性を示している。われわれの教授環境では、教室外での自然な英語によるコミュニケーションはほとんど望めない以上、教室内のコミュニケーションをいかに豊かなものにし、英語を使用する機会をいかに豊富に与えるかが重要である。意見・考えを取り上げることによって、その機会を容易に提供することができ、意見・考えを表出する経験を通して、既習の言語形式を繰り返し使用させることにより、理解のレベルにとどめるのではなく発表のレベルにまで引き上げる効果が期待できる。

学習者がスムーズに意見・考えを英語で発表することができない主な理由は、学習者が自分の意見・考えを英語で適切に表現できないこと、自分の意見・考えを持つことができないこと、そして意見・考えを表現することに心理的抵抗を感じることである。限られた授業時間の中で、高い学習効果が得られるように意見・考えを英語で発表させるためには、この英語面 (言語

面)、内容面、心理面の3つの障害を考慮することが不可欠である。ここでその効果の再検証を試みたAD Taskはこれらの障害を克服するための効果的な指導法の1つとして、その有効性に十分期待が持てることを再確認することができた。

今後の課題1つは、インプットからアウトプットへと4つのスキルを「意見・考え」をベースに有機的に統合したAD Taskの枠組みを用いて、単なる賛否の主張にとどまらず、問題に対する解決策を提案するProblem-solving Task⁵のような発展的タスクを開発することである。

また、AD Taskは一方向のタスクであるが、学習者相互のインタラクションを要求するステップを組み込んで双方向のタスクにすることができれば、意味の交渉(negotiation of meaning)が生じ、より学習効果が高まることが期待される。

注

1. トピックのライティングの流暢さおよび評価に及ぼす影響を調べるため、前回のAD Taskの実践と前半、後半で使用された命題を入れ替えて実施した。その結果、少なくとも使用したトピックについては流暢さおよび評価には影響がないことが明らかになった。
2. このAD Taskの実施手順は、Post-task(事後指導)⑩ Error Correctionを除いては紺渡(2013)に述べられた手順と同じである。説明の便宜上再掲した。
3. AD Taskを実施した本授業で用いられた教科書は、ライティングのスキルを練習するためのものであり、賛否を議論する内容を提示する種類のものではなかったので、タスクの実施に際しては、英字新聞などの記事を活用して背景知識を補った。
4. holisticな評価であり、個別の観点ごとに測定して、その結果を合計して評価したわけではないが、いちおう、内容、構成、言語(英語)の3つの観点を念頭に置いて総合的に評価した。
5. このタスクについては紺渡(2014)を参照のこと。

謝辞

本研究はJSPS科研費24531159の助成を受けた研究の一部である。

参考文献

- Ellis, R.(2009). The Differential Effects of Three Types of Task Planning on the Fluency, Complexity, and Accuracy in L2 Oral Production. *Applied Linguistics*, 30(4), 474-509.
- Ellis, R. & Shintani, N.(2014). *Exploring Language Pedagogy through Second Language Acquisition Research*. London and New York: Routledge.
- Housen, A. & Kuiken, F.(2009). Complexity, Accuracy, and Fluency in Second Language Acquisition. *Applied Linguistics*, 30(4), 461-473.
- Housen, A., Kuiken, F., & Vedder, I.,(Ed.).(2012). *Dimensions of L2 Performance and Proficiency: Complexity, Accuracy, and Fluency in SLA*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 紺渡弘幸(2013).「英語の授業における意見・考えの表出を求める効果的な指導法」『中部地区英語教育学会 紀要』第43号, 201-206.
- 紺渡弘幸(2014).「英語の授業における意見・考えの表出を求める効果的な指導法—問題解決型タスクの効果と課題—」『中部地区英語教育学会 紀要』第44号, 163-168
- Larsen-Freeman D.(2009). Adjusting Expectations: The Study of Complexity, Accuracy, and Fluency in Second Language Acquisition. *Applied Linguistics*, 30(4), 579-589.
- Ortega, L. (2003). Syntactic Complexity Measures and their Relationship to L2 Proficiency: A Research Synthesis of College-level L2 Writing. *Applied Linguistics*, 24(4), 492-518.

要 約

意見・考えの表出を求める指導法として開発された Agree/Disagree Task (AD Task) の効果を再検証するために、学習者が書いた作文を複雑さ (Complexity) , 正確さ (Accuracy) , 流暢さ (Fluency) 及び作文の評価の観点から分析したところ、正確さ、流暢さ、評価において効果が認められ、意見・考えを表出する際の言語面・内容面・心理面の課題を克服する有効な指導法としてのこのタスクの可能性が示された。

